

# 神奈川大学21世紀COEプログラムにおける 「非文字資料の体系化」とは何か

河野 通明

## 目 次

### はじめに

- I 河野における民具という非文字資料の研究
- II 「人類文化研究のための非文字資料の体系化」の河野の受け止め方
- III 非文字資料とは何か
- IV COEプログラムの統合のあり方について
- V 理論総括班的的場昭弘氏の提起について
- VI 民具・民族をめぐるラフィン氏の質問への回答

## はじめに

COEプログラムはそれなりの人数を擁した大所帯なので、全体会議も事務連絡が主とならざるをえず、非文字資料とは何か、非文字資料の体系化はどうあるべきかについて、議論する機会はほとんどなかった。神奈川大学COEが折り返し点を迎えた2005年以降、全体会議の場で非文字資料の体系化とはどうあるべきかについて何度か私見を述べたが、あまり反応はなかった。そうしたなかで迎えた2006年10月28、29日の第2回国際シンポジウムでは、理論総括班的的場昭弘氏から、実証的研究ではなく視点や発想を変えて認識論の研究をやろうではないかという趣旨の提起があった。しかしながらそれでは各班の進めてきた成果の総括にはならず、まとめの段階には相応しくない発言と受け止められたので、総合討論での場氏との見解の違いを煮つめたかったが時間がなくて果たせなかった。今回、構成員全員に対して的場氏より理論総括班的の論文集への

原稿募集のメールが送られてきた。『非文字資料研究の理論的課題』という論文集のタイトルは、日ごろ考えている非文字資料の体系化についての私見をまとめるいい機会なので応募することにし、的場氏への反論もこの場で展開することにした。

本稿は2005、2006年段階で考えてきたことをまとめたため、神奈川大学21世紀COEプログラムはこういう方向でまとめるべきだという形で私見を述べているが、この報告書が出る段階ではすでにプログラムは終わっており、その意味では時期の外れた提起となっている。しかしながらCOEの非文字資料研究は非文字資料研究センターに引き継がれることになっているので、この5年間で議論の深まらなかった非文字資料とは何か、非文字資料の体系化はどうあるべきかを正面から論じた本稿は、それなりに意味をもつものと考えている。

## I 河野における 民具という非文字資料の研究

私が「人類文化研究のための非文字資料の体系化」をどう受け止めたかは、これまで進めてきた民具研究歴に大きく関わっている。したがってまずその点を振り返ることから始めたい。

**文献古代史から民具調査へ** 1960年代の戦後歴史学の唯物史観全盛期に史学科の学部・大学院時代を過ごした私は、マルクスの「土台が上部構造を規定する」論に出会って人類社会を構造的に捉える鍵はこれだと感じて社会経済史研究に入った。マルクスは、社会は生産力と生産関係との矛盾で発展する、つまり生産力が大きく成長して生産関係が窮屈に感じられるようになった段階で社会変革が起こり、社会体制が変わると説明する。

前近代日本の基幹産業は稲作農業である。ならばその生産力の発展を跡づけて、ベースの部分から日本の社会発展を解明しようと社会経済史研究に入ったのだが、10数年を経て振り返ったとき、文献史学の社会経済史研究は、文献史料の性格に規定されて生産関係史の範囲を出ず、生産力史に踏み込めていないことに気がついた。

文献史料は主に米が税や年貢として収納される過程やその後の分配過程で作成されるものであり、生産過程は記録されにくい。生産力に踏み込むには農業技術史をやらねばと思ったが、この分野の最高峰である古島敏雄『日本農業技術史』<sup>(1)</sup>(1947、49)は文献史料による研究で農具の図は一枚も掲載されていない。生産力の発展は農具の形の変化として現れる。したがって形のある資料を集めねばならないが、考古資料は数が限られている上に破片で出土することも多く、部材から全体像を復原する眼力が必要となる。そのためには在来農具をよく知っておか

なければならない。また農具の姿を知る資料としては絵画資料があるが、絵は写真ではないので、写実度はどの程度かの史料批判が必要であり、そのためにも在来農具の知識は不可欠である。そこで地元大阪を中心に博物館・資料館の収蔵庫を見せてもらって農具の計測調査を始めたのが1981年である。

**農具から「民具」へ** 日本史各時代の生産力を明らかにしようと始めた調査であったから、その調査対象は近代化以前の形をとどめた在来「農具」であった。調査を始めて間もなく近畿民具学会・日本民具学会の存在を知り、会に入れば学芸員さんたちと友達になれて、収蔵庫も見せてもらえるし博物館情報も入ってくるだろう、というまったく実利的な理由で入会した。ここで「民具」という言葉に出会ったが、そこには民芸に通じる美意識や情感が込められているようで、客観性を重んじる科学的歴史学を志す者にとっては、あまり好きにはなれなかった。

十数年経つと状況が変わってきた。70～80年代に歴史民俗資料館が各地で建設されたが、そのブームの去った90年代からは、地元住民にとっては懐かしいが珍しくはなく、汚くてかさばる民具はしだいに厄介者扱いにされ、整理・廃棄の圧力がかかって学芸員氏が孤軍奮闘するという状況が増え、民具の保存が大きな課題となってきた。これらの市町村では民具という言葉が普通に使われており、「民具を見せてください」「民具の保存」という言葉でこちらの意図がすぐ通じる状況が生まれていた。民具の保存を訴えるためには、日本語化した「民具」を使う方が戦略的にも有利という状況になったのである。そこで民具という言葉積極的に使っていこうと頭を切り換えた。

**農具には遺伝子がある** 調査は大阪を中心とする日帰り圏の博物館・資料館回りから始めたが、すぐに気づいたことは、これまでの「農具は長い時間をか

けてその地域の地形や土質に合わせて改良を重ねた結果、いま見るような多様な形となった」という理解は単なる思い込みに由来するものであり、事実とは大きく異なるという点である。確かに鍬などについては風土への適応という理解はある程度あてはまるが、牛馬に引かせる<sup>からすき</sup>犁についてはまったく様相が異なる。大阪を含む近畿地方は、水田でも畑でも、平地の田でも山田でも<sup>ちよう しよう すき</sup>長床犁を使うという長床犁地帯であり、その反対に福岡県北部では水田でも畑でも、平地の田でも山田でも<sup>かかえ もつたてすき</sup>抱持立犁を使うという無床犁地帯である。ここでは地形や土質と犁型は対応していない。ところすでに知られているように長床犁は中国系であり、無床犁は朝鮮系である。つまり各地の犁型はそこに朝鮮系渡来人が来たか来なかったか、来たとしてもその影響力はどの程度だったかといった歴史的事情によって決まっていたのであり、この原理を逆に使えば、犁型の広域比較から各地それぞれの古代史を復原することができる。これは新「発見」であった。

**大化改新政府の殖産興業政策の発見** 1985年、香川県の下川津遺跡で鍛造犁先の痕跡と一木造りの犁へらを備えた7世紀中葉の犁が発見された。一木造り犁へらに鍛造犁先という中国や朝鮮半島には見られない特異な形態には呆れるほど驚いたが、この点については畿内ではアジア並に鑄造犁先・犁へらは製作可能だが、鉄材料と鑄造技術の不足する讃岐地方独自の地域的対応であろうと解釈した。だがその後、兵庫県の川除・<sup>かわよけ</sup>藤ノ木遺跡、梶原遺跡、<sup>あさか</sup>安坂・<sup>じよう</sup>城の堀遺跡で一木犁へらやその痕跡をもつ7世紀犁が発掘され、長野県の屋代遺跡からは祭祀用ミニ模型が発掘された。このように7世紀に一木犁へらが各地で発見されたとなると、各地ごとの地域的対応では説明がつかず、何らかの規格の存在が浮かび上がってくる。

一方、1981年に研究を始めた当初から、日本古代史には中国系渡来人が大挙して日本列島に入ってきた事実はないにも関わらず、九州から関東までの在来犁に中国系長床犁が見られることから、政府が遣唐使を通して唐代犁を入手し、全国に普及を図ったのであろうという見当はつけていた。古代では設計図で技術移転できるわけではなく、中国でも日本でも実物模型を送り届ける形をとっており、そのモデルを「<sup>よう</sup>様」、和訓は「ためし」と呼んでいた。この事実を踏まえるなら、7世紀に各地で出土する一木犁へらは、政府の流した様＝政府モデル犁のコピーと考えると辻褄が合う。

他方、調査を始めて15年目、1995年から始めた四国調査では、在来犁のなかに鍛造犁先・一木犁へらの痕跡が次々見つかってきた。また1999年から2000年にかけての広島県調査で数多く見つかった犁頭の段差も、鍛造犁先・一木犁へらを後に鑄造犁先・鑄造犁へらに取り替えたことに由来する改造の痕跡と考えれば辻褄が合う。日本への長床犁の導入は古辞書からして7世紀代であり、導入政策の実施には国郡（評）制の整備と、遣唐使の派遣が条件となるので実施主体は大化改新政府すなわち中大兄＝天智政権と絞り込めること、これは7世紀の一木犁へらの各地での出土と辻褄が合うことなどから、2000年の時点で大化改新政府による長床犁導入政策説の構想はほぼ固まった。これはたまたま犁を追っていたために長床犁導入政策が見えてきただけであって、その本体はさまざまな農具や紡織具の普及を含む殖産興業政策であろうという見当もついた。

**「民具からの古代史」の可能性** 明治政府は西洋から立憲君主制の政治制度や徴兵制にもとづく近代的軍制の導入とともに、経済面では機械制大工業の導入を目指した殖産興業政策を行ったことは周知の事実である。ところがいま大化改新政府もまた唐帝国

図1 文献からの古代史 と 民具からの古代史

	文献からの古代史	民具からの古代史
資料の数	きわめて少ない	全国に無数
地 域	都とその周辺	全国どこでも
階 層	天皇・貴族	一般庶民
記録内容	政治・外交	生産・生活＝経済
記事の性格	事件性のあるもの	日常的なもの
年 代	年代の特定が可能	世紀の限定なら可能
殖産興業政策 技術導入政策	記録されにくい	痕跡は確実に残る
所有関係	見えやすい	見えにくい
生産技術	見えにくい	具体的に見える

に対抗する富国強兵政策の一環として、先進国唐の農業技術の導入・普及を目指した殖産興業政策を行ってきたことが浮かび上がってきたのであり、文字記録に残っていなかった、したがって文献史学では想像だにしていなかった重要政策が、民具調査を通して見えてきたわけで、「民具からの古代史」の可能性を確信することとなった（図1）。

ただこれを世間に提示するには、十分な検証を経た上でないといけない。そこで2002年度の国内研修で身を置いていた国立民族学博物館では、水曜日の休館日に展示室を一回りして世界の民具をじっくり見ることを自らに義務づけ、特に以前から気になっていた山口県岩国市の犁の前では数分間立ち止まって政府モデル犁のコピーと考えていいかどうかを確かめ、間違いないと確信した。翌2003年にはこれも以前から気になっていた東京都足立区・葛飾区の板へら付き長床犁を、政府モデル犁のコピーと考えて間違いなさを調査しつつ確信を得て、6月の大阪歴史学会大会で「民具の犁調査にもとづく大化改新政府の長床犁導入政策の復原」の発表を行った。<sup>(2)</sup>

神奈川大学21世紀COEプログラムが文部科学省の審査を経て合格通知が届いたのはちょうどこの前後で、配属された2班の「身体技法および感性の資料化と体系化」にはミスマッチを感じながらも、全

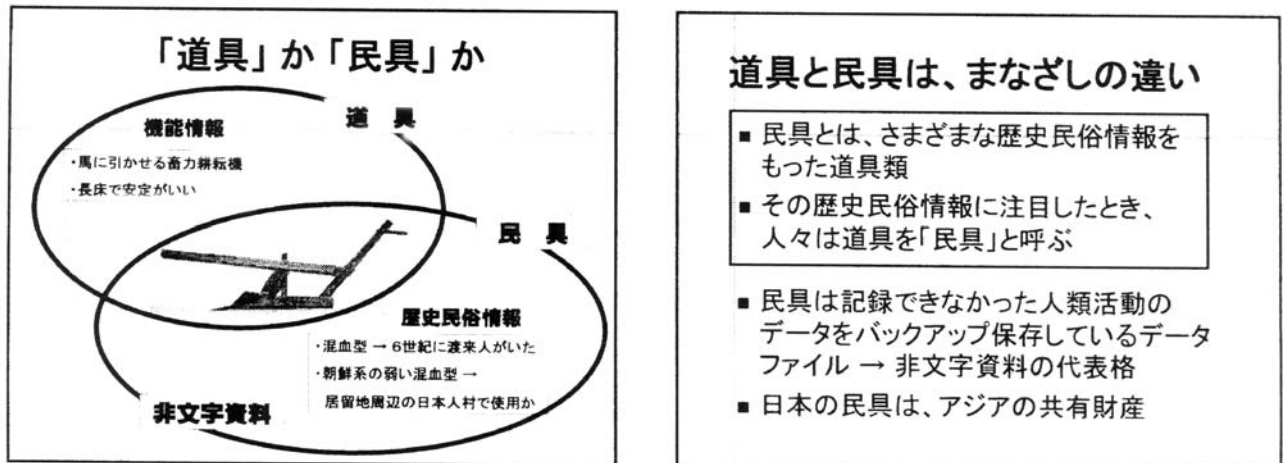
体を括る「人類文化研究のための非文字資料の体系化」に対しては、これまで進めてきた民具調査研究とぴったりだと感じた。

「民具」概念のリニューアル COEに参加して以来、他分野の方々から、なぜ「道具」ではなく「民具」なのか、とたびたび問い詰められたが、これを受けて2006年の第2回国際シンポジウムでは、図2のように「民具」概念のリニューアルを提起した。「民具」という言葉は民具研究の創始者である渋沢敬三たちが「我々の同胞が日常生活の必要から技術的に作り出した身近卑近の道具」（1936）と規定したことに始まるが、これは1930年代の日本の、民具を研究しようとする人たちの仲間内の規定であり、「我々の同胞が」という部分では日本国内に限定されているし、「日常生活の必要から技術的に作り出した」という部分からは、犁のような外来の道具は除外されることになり、「なぜ「道具」ではなく「民具」なのか」という問いにも答えられていない。

そこであらためてなぜ私が「道具」ではなく「民具」という言葉を使っているのかと振り返れば、たとえば犁は、その形を見れば牛馬に引かせて田畑を耕す道具と分かるという「機能情報」のほかに、いつ、どこから、どんな事情で伝わったかという「歴史民俗情報」を併せもっており、だから非文字資料として有用だと考えているのである。これを整理して第2回国際シンポジウムの報告書では「民具とは、機能情報を超えたゆたかな歴史民俗情報をもった道具類」と規定したが、「機能情報を超えた」はやや曖昧な表現であり、「ゆたかな歴史民俗情報」も「ゆたかではなく少しなら民具ではないのか」ということにもなりかねないので、シンポジウム当日のパワーポイント画面（図2）の通り、素直に「民具とは、さまざまな歴史民俗情報をもった道具類」と修正しておきたい。道具は多少なりとも歴史民俗情



図2 道具と民具



報をもっているが、その「道具」をもつ歴史民俗情報に注目した場合、それを民具と呼ぶ」と理解すれば、「民具」は日本という枠を越えた国際的に通用する分析概念となり、国際的に研究を広げることが可能となる。

## Ⅱ 「人類文化研究のための非文字資料の体系化」の河野の受け止め方

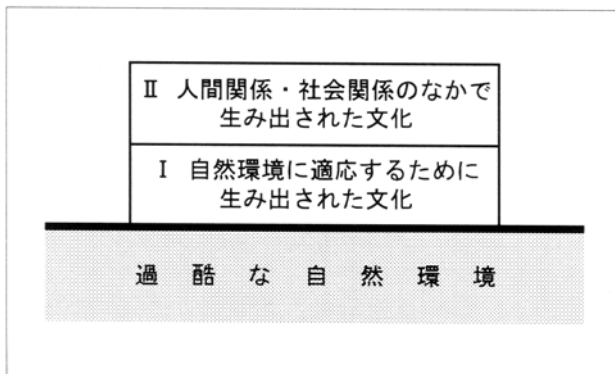
神奈川大学21世紀COEプログラムの表看板である「人類文化研究のための非文字資料の体系化」については、河野は次のように受け止めた。

**20世紀後半の地球科学と生命科学の飛躍的發展** 20世紀後半に我々の自然認識は、地球科学と生命科学の2つの面で飛躍的に進んだ。60年代までの高校教科書では山脈の生成を、沈降を続ける地相斜が、ある日突然隆起に転じるためと説明していたが、これはいかにも不自然で理解しがたいものであった。それが大陸移動説・海洋底拡大説を経て登場したプレートテクトニクスによって、地球上の火山も地震も造山運動も海溝の分布もすべてマントル対流というひとつの原理で説明できるようになり、地震の予知情報が出せるところまできた。人類の地球認識としては万有引力の法則の発見に近い快挙である。もうひとつは2003年にヒトゲノムの解読にまで進んだ生命科学の進展である。1953年のDNAの二重らせ

ん構造の発見に始まる分子生物学は、18世紀のリンネの自然分類と、それに時間軸を加えた19世紀のダーウィンの進化論を受けた形態分類による生物の分類と進化の道筋を大きく新たな段階に進めたばかりでなく、人類を万物の霊長として自然と闘い克服する旗手としてきたキリスト教的世界観に対して、人も地球上に生まれた多様な生命体のひとつにすぎないという謙虚な世界観をもたらした。また地球史研究の深化は、地球から生まれた光合成をするバクテリアが大気のなかの酸素濃度を高めて地球環境そのものを変化させ、それがさらに酸素呼吸によって活発に動き回る動物群を生むといった事実や、地球全体が熱球になるといった事態や逆に全球凍結といったダイナミックな進化を繰り返し、その都度生命体はほとんど絶滅して、わずかに生き残った種が次の段階で爆発的な適応放散を遂げるという地球と生命とのインタラクティブな進化の事実を明らかにした。これをふまえて「生命と地球の共進化」という総合的な捉え方が提起されている。<sup>(3)</sup>

**「生命と地球の共進化」の体系に人類史をドッキングさせること** その何十億年にわたる長い生命史のごく最近に現れた人類が全地球に拡散し、化石燃料を大量に消費して地球環境を破壊し多くの種を絶滅に追い込んでいるのが現状であり、地球温暖化によって人類そのものの生存が脅かされ、待ったなしの対応が迫られているのが、21世紀初頭の状況であ

図3 文化の二重構造



る。いま地球環境や他の生物に対して、人類はどの段階で何を行ってきたのか、という人類史の総点検、再検討が求められている。文部科学省の「21世紀」を銘打ったCOEプログラムとして採用された神奈川大学の「人類文化研究のための非文字資料の体系化」は、この課題すなわち自然科学分野の地球科学と生命科学の進展によって明らかにされた「生命と地球の共進化」の体系に人類史を織り込んで、人類が地球環境や他の生物に対してどう関わってきたのかを明らかにするための人文・社会科学からのアプローチと河野は位置づけており、そのためにこそ「非文字資料」が大事なのだと考えている。以下その点を展開しよう。

**COE『概要』の非文字資料の位置づけの問題点** COEプログラムでは「概要」と呼び習わしているパンフレット『人類文化研究のための非文字資料の体系化』の裏表紙には、「非文字とは？」という囲み記事で次のように解説されている。<sup>(4)</sup>

人類文化の研究は、人間それ自身と人間が織り成す社会を研究することを目的とするが、その研究は文字で表現された資料を主な対象として行われてきた。(中略)本プログラムでは、そうした文字以外の「記録」及び文字では表現されにくい人間諸活動を「非文字」として体系化し、それを研究する新しい方法を開発し、より包括的な人間と文化の理解にいたることを目指している。

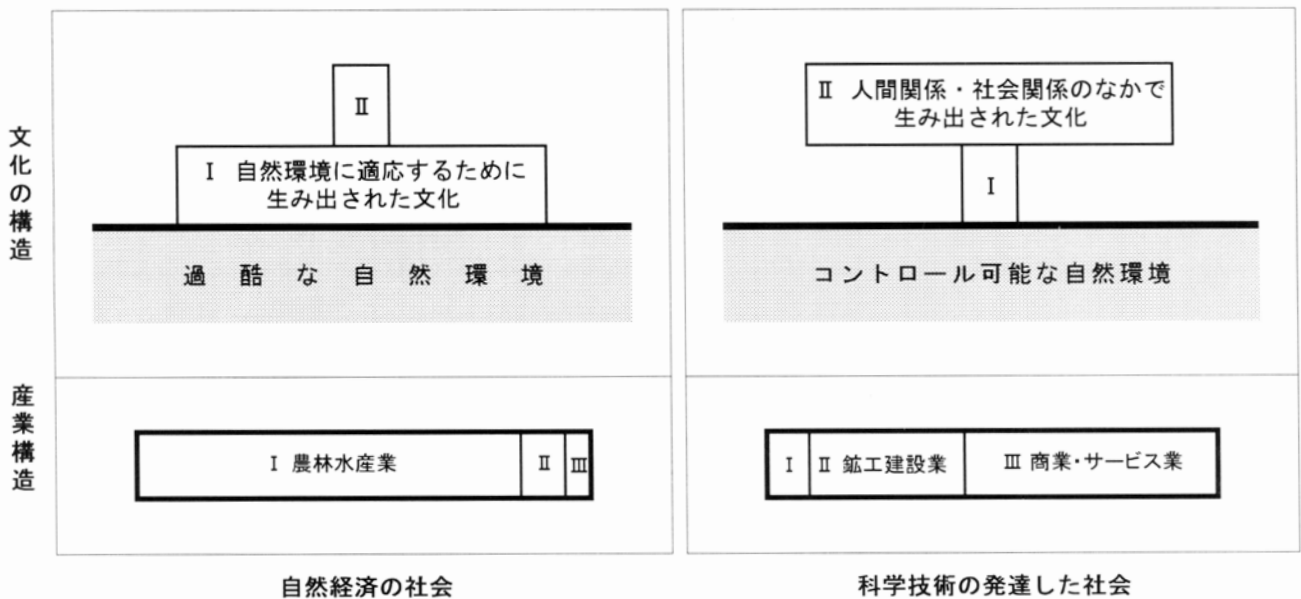
この冒頭の「人類文化の研究は、人間それ自身と人間が織り成す社会を研究することを目的とする」

という部分については、私の見解とは大きく異なる。

人類の初期の「文化」、たとえば道具を作って狩りをするとか、寒さ対策や猛獣よけに火を起こして使うとか、寒さ対策に衣類を作って身にまとうなど、本能を超えた工夫を次の世代に教育して伝えていく文化は、過酷な自然環境に適応するなかで生み出されたものである。のちに人類社会が大きくなり大集落や都市への集住が現れて社会が複雑化してくると、人間関係・社会関係に関わる文化が形成される。つまり人類文化は図3に示したように①自然環境に適応するために生み出された文化（第Ⅰ類の文化）の上に、②人間関係・社会関係のなかで生み出された文化（第Ⅱ類の文化）が重なるという二重構造をなしているわけである。この観点から見れば、COE『概要』の「人類文化の研究は、人間それ自身と人間が織り成す社会を研究することを目的とする」という規定からは第Ⅰ類の自然環境に適応するために生み出された文化がきれいに欠落していることが看取されよう。「人間それ自身と人間が織り成す社会を研究する」とか「より包括的な人間と文化の理解にいたることを目指している」という、すぐれて人文科学的関心による絞り込みからは、21世紀初頭、地球温暖化をどうする？ という緊急課題に人文・社会科学としてどう対応するかという切迫感が感じられない。

それに反してCOEの班ごとの研究課題、とくに2班の身体技法・感性、3班の環境・景観を見れば、主に自然環境に適応するために生み出された文化を研究対象としており、構成員の川田順造氏の身体技法の国際比較にしても、廣田律子氏の辟邪の芸能研究にしても、北原糸子氏の災害研究にしても、自然環境に適応するために生み出された文化の研究である。したがって『概要』の非文字資料の説明は、神奈川大学21世紀COEプログラムの研究内容とも大

図4 文化と産業の構造変化



きく乖離しているといわざるをえない。

**文字資料は人間社会内部の記録が中心、だから非文字資料** 先に述べた地球環境や他の生物に対して、人類はどの段階で何を行ってきたのか、という人類史の総点検、再検討の課題と付き合わせれば、文字資料の限界は自ずから浮かび上がってくる。文字資料は第1に、階層的には王や貴族の記録が中心で庶民に関する記事は少なく、空間的には都に厚く地方に薄いという傾向性をもつこと。第2に、内容的には人类社会内部の記録が中心となり、人と自然との関わりに関する記録は少ないこと。第3には、過去に向かったの射程距離の短さである。世界史的に見て文字の発生は西アジアではほぼ5000年前、東アジアの漢字はほぼ3500年前、日本でまとまった文字記録があらわれるのは8世紀初頭の『古事記』『日本書紀』で1300年前、それを遡ると7世紀の木簡や5世紀の稲荷山鉄剣銘のような遺物となり、資料数は激減する。文字資料は近現代に厚く、時代を遡れば加速度の逆数をとったように減少する。

これに対して自然地形のなかに刻み込まれた棚田のような人工の痕跡は、人と自然との関わりに関する記録であり、河野の扱ってきた農具に含まれる遺伝子的な歴史民俗情報は、やはり人と自然との関わりに関する記録である。また棚田や農具に含まれた

遺伝子的情報は、都の王や貴族の情報ではなく、地方の庶民の、日々を生きるための経済活動や生活情報であり、文字記録にもっとも残りにくいものである。つまり非文字資料は先ほど指摘した文化の二重構造のうち、第Ⅰ類の自然環境に適応するために生み出された文化の情報が中心であり、文字資料の苦手とする分野であって、だからこそ非文字資料が重要なのである。

先ほど自然環境に適応するために生み出された文化の説明のなかで農具と棚田を例に挙げたが、自然環境に適応するために生み出された文化はこうした物的資料に限定されるわけではない。災害の除去、見えない疫病や不幸の侵入を阻止する辟邪の呪術や祀り、その祀りの所作やそれを描いた絵画資料もまた自然環境に適応するために生み出された文化であり、非文字資料研究の重要な部分を占める。

**第Ⅰ類の文化、第Ⅱ類の文化の比重の変化** 先ほど述べた文化の2類型、自然環境に適応するために生み出された第Ⅰ類の文化と人間関係・社会関係のなかで生み出された第Ⅱ類の文化は、図4に示したように第Ⅰ類の文化によって人間社会が守られた上に第Ⅱ類の文化の花が咲くという構造になっている。したがって科学が進み機械化が進んで自然の脅威が薄れると、第Ⅱ類の文化の占める割合が大きく



なってくる。これは科学技術の未熟な段階では自然を相手に食料を確保する農林水産業といった第一次産業従事者が人口の大部分を占めていたのに対して、農業の機械化や化学肥料・農薬の発達した今日では第一次産業従事者はほんの数%なのに対して、商業やサービス業などの第三次産業従事者が過半を占めるようになっていくという産業構造の変化と似ており、似ているというよりはリンクしているのであらう。

### Ⅲ 非文字資料とは何か

前節では『概要』の非文字資料の規定の批判を通して非文字資料とは何かを考えてきたが、2006年の第2回国際シンポジウムでは的場昭弘氏がこの問題を正面から取り上げて議論しているので、次にそれを紹介しつつ私見を対置して非文字資料とは何なのかに迫ることにしたい。

**的場昭弘氏の非文字資料の定義** 的場氏の第2回国際シンポジウムセッションⅠでは、「非文字資料とは何か」と題して次のように述べている。<sup>(5)</sup>なお文章は文意を損なわない範囲で（中略）記号を用いて圧縮し、また分析の便宜上段落に分けてa～eの記号を付し、重要部分には下線をほどこした。

a 確かに話し言葉は、書かれたものでないことによって非文字資料のひとつといえないことはありません。しかし、文字文化に親しんだ世界で話される言葉は、すでに文字言葉の文法によって規定されているので、文字資料と考えられなくはありません。

b ひとつ極端な例を考えましょう。非文字資料を、記号や数字もまったく含まない、文字的コードの体系をまったく欠いたものと仮定してみるのです。非文字資料を、何も伝えることのない、ま

た何も記憶することのない、「ものそれ自体」だと考えてみます。しかしそうしたものそれ自体の資料は、確かに今後われわれにとっての考察の対象となりうる可能性はあるとしても、それを知覚し、理解しようとする人間の行動を抜きにしては、ほとんど意味のない資料ということになります。

c そこで非文字資料を問題にするとしても、ものそれ自体ではなく人類にとって何らかの意味をもつものでなければならないことになります。次にそれ自体文字のような明確な記号や意味を表示しないが、しかしあることを示唆、暗示しているようなもの、それを非文字資料と置いてみましょう。記号としての身体動作、音、匂いなどはすべてこの範疇に入ります。（中略）

d 改めて定義しなおすと、非文字資料を文字資料の文法コードの体系以外の記号と考えるということです。もちろん記号ですから、単なるものではなく、誰かが誰かに何らかの意味を伝えようとするものを意味します。（中略）

e こう考えると、非文字資料とは、その資料が文字でないという曖昧な意味ではなく、文字ではない資料だが、何らかの共通認識を引き出す資料ということになります。非文字資料が共通認識をもつとすれば、そうした共通認識をする側の知覚の問題が重要な論点となってきます。

的場氏の考える非文字資料とは、b段落では「ものそれ自体の資料は、（中略）それを知覚し、理解しようとする人間の行動を抜きにしては、ほとんど意味のない資料」といい、c段落では「あることを示唆、暗示しているようなもの」「記号としての身体動作、音、匂い」とし、d段落では「誰かが誰かに何らかの意味を伝えようとするもの」と絞り込んでいて、河野が当人の意図とは関係なく偶然に残ってしまった痕跡を重視するのとはかなり異なる。ま



たe段落の「文字ではない資料だが、何らかの共通認識を引き出す資料」という規定は曖昧で具体性がなく、実際に非文字資料を研究対象として扱ったことのない人の議論という印象が強い。

これを先ほどの文化の2類型、第Ⅰ類の自然環境に適應するために生み出された文化と、第Ⅱ類の人間関係・社会関係のなかで生み出された文化に照らして見れば、的場氏の関心はもっぱら第Ⅱ類の人間関係・社会関係のなかで生み出された文化に限られていて、第Ⅰ類の文化がすっぽりと抜け落ちていることが明らかになる。哲学者の的場氏は非文字資料の本質を図像・民具・景観のような具体物から帰納法でさぐるという方法をとらず、絞り込みの過程はきわめて抽象的な思考であり、そのため第Ⅰ類の文化の脱落が見えにくくなっており、その上で「認識をする側の知覚の問題が重要な論点」と非文字資料研究を認識論研究に置き換える構造となっている。ここからは的場氏は自然環境に適應するために生み出された第Ⅰ類の文化にはほとんど関心がないことがうかがえるが、これでは地球規模の環境破壊が問題となっている21世紀初頭の状況下において、人類史を総点検しようという大きな課題に対する的場氏の寄与はあまり期待できない。

**河野による非文字資料の定義** 歴史屋で実証屋の河野は、的場氏とは少し違って、つねに具体的イメージをともなった絞り込み方をしている。「ものそれ自体の資料」についても的場氏のような「それを知覚し、理解しようとする人間の行動を抜きにしては、ほとんど意味のない資料」という捉え方をするのはなく、もっと客観的に、人類活動に関わりの有無を基準として、人類活動に関わりのない自然物、山や恐竜の化石や気象など自然そのものは自然科学の対象ではあっても「人類文化研究のための非文字資料」には含めないが、民具のような「ものそれ自体

の資料」や棚田のような景観は人類活動の痕跡をとどめている点で非文字資料である。つまり、

非文字資料とは、文字以外の資料で人類活動の痕跡をとどめているもの

であり、非文字資料か否かは「認識をする側の知覚の問題」ではなく、人類活動の情報の有無という客観的に判別できるものを基準に設定している。

的場氏は「非文字資料を文字資料の文法コードの体系以外の記号」というように何らかの意味のある情報を発信しているものという捉え方をするが、歴史研究者の河野は文字ではなくても人類が活動したなら痕跡は残るはずだとして痕跡を重視する。人は生きるため、田畑を耕すために犁を作ったが、壊れても同じ形で更新を繰り返したため、その地に朝鮮系渡来人が来たか来なかったか、入植したのは6世紀か7世紀かという情報を残しており、呼称はデビュー当時に地域社会でどう受け止められたかという情報を記録保存している。これらの歴史民俗情報は当時の人々が意図して記録したのではなく、彼らの意図とは無関係に痕跡としての物的資料側に記録されたのであり、その意味で客観性のある資料であって、歴史屋はこの痕跡を重視する。

**未文字資料・準文字資料・非文字資料** この立場から非文字資料を整理してみると、図5のようになりう。まず「人類活動に関する資料」として純然たる自然を除外した上で、人々が何らかのメッセージを伝えようとした「記録・記憶資料群」と、偶然に残ってしまった人類活動の痕跡である「痕跡資料群」とに大別する。前者の記録・記憶資料群には、文字資料と口頭伝承、図像が含まれるが、民俗学が研究の対象としてきた「伝承」は、すでに人の認識を経て言葉化されている点では、文字資料と構造的に同じである。的場氏も先のa段落で「文字文化に親しんだ世界で話される言葉は、すでに文字言葉の文法

図5 文字資料と非文字資料

人類活動を伝える資料	記録・記憶資料群 人が何らかのメッセージを伝えようとした資料	未文字資料	口頭伝承	文法コード化されたもの：デジタル資料	広義の文字資料
		文字資料	文字記録		
		準文字資料	図像(絵画資料と彫刻)	文法コード化されていないもの：アナログ資料	広義の非文字資料
	痕跡資料群 生きるための活動のなかで、主目的とは違った歴史民俗情報が偶然に残ってしまった資料	非文字資料	民具(さまざまな歴史民俗情報をもった道具類)		
			遺構(田畑・城跡・道など景観に刻まれた人間活動の痕跡)		
			民俗技術(伝承された手仕事のわざや道具の使い方)		
			身体技法(文化によって条件づけられた身体の使い方)		

有形資料

無形資料

によって規定されているので、文字資料と考えられなくはありません」「話し言葉は、それを表現する文字を欠いた場合は別として、文字資料に入る」と発言しているが、この見解には賛成である。つまり伝承は「文法コードの体系」にのった資料＝デジタル資料であり、ただ文字記録されていないだけであって、文字化される直前の資料として「未文字資料」と呼ぶことにしよう。

次に図像＝絵画資料と彫塑類は、人々の認識を経て表出された資料、つまり何かを表現しようとして作られたものという点ではきわめて文字資料に近いものであり、「準文字資料」という位置づけを与えておこう。ただ絵巻物において主題と離れて小道具として描かれた民具類などは中世の庶民生活を客観的に伝える資料であり、したがって図像は広義には非文字資料と位置づけできよう。

それに対して民具やその使い方である民俗技術、人類活動が刻み込まれた景観＝遺構、それに文化によって条件づけられた身体の使い方である身体技法は、当人の意図とは無関係に偶然に残ってしまった痕跡で、たとえば棚田にしても山間に住む人々が生きるために耕地作りに励んだ結果が棚田景観になったもので、努力とか勤勉とか自然に対する勝利といったメッセージを伝えるために作ったモニュメントではない。これら民具・遺構・民俗技術・身体技法

は文字資料からはもっとも遠いもので、狭義の「非文字資料」と位置づけできよう。

以上のような分類をした上で、河野は長年調査してきた民具を、文字以外の資料のなかでもっとも非文字資料らしい資料と認識し、COEプログラムのなかでその解明に努めているのである。

#### Ⅳ COEプログラムの統合のあり方について

「生命と地球の共進化」の体系に人類史を織り込む神奈川大学のCOEプログラムが折り返し点を迎えた2005年度から、河野は各班が積み重ねてきた成果を総括する方向性について、「人類文化研究のための非文字資料の体系化」を謳って採用された神奈川大学COEの総括の方向は、20世紀後半に飛躍的進歩をとげた地球科学と生命科学の進展によって明らかにされた「生命と地球の共進化」という自然科学の体系に人類史を織り込んで、生命史のごく最近に現れて地球規模の環境破壊までやってしまった人類の地球環境との相関の歴史を人文・社会科学からのアプローチで明らかにすることではないか、と提起した。とはいってもそれぞれの班、課題チームで取り組んでいる課題と成果は、何百万年の人類史、ホモ・サピエンスの出アフリカ以降に限っても10

図6 「非文字資料の体系化」のなかの各班・課題テーマの位置関係

05.7.17/河野

タイム スケール	地球史	人類史／環境史	COEプログラム
10億年	地球の誕生 鉄鉱床の形成	生命の誕生	
1億年	石炭・石油の生成 中生代	恐竜の時代	
1000万年	新生代第三紀	哺乳類の時代	
100万年	第四紀／氷河時代	サルからヒトへ	
10万年	氷期・間氷期 の繰り返し	原人 ホモ・サピエンスの出アフリカ 人種の分化	川田：人種間比較
1万年	ウルム氷期 温暖化 → 高温期 寒冷化	モンゴロイド、新大陸へ拡散	
1000年		ユーラシアの民族移動 文明のおこり／文字の発生 漢字の誕生 絵巻物の誕生	河野：列島内多民族の検出 1班：中世絵引の翻訳 1班：近世絵引の作成
100年	鉄・石炭の採掘 石油の乱掘 オゾン層破壊	イギリスの産業革命 錦絵誕生 瓦版から新聞へ ラジオ 高度成長／公害 テレビ インターネット 京都議定書	北原：災害史・写真史 渋沢写真 八久保：環境変化調査
10年			
1年		クール・ビズ	

【只見の位置】

- ① グリーンタフ造山地帯
- ② 雪国
- ③ 縄文文化の後裔
- ④ 大和と蝦夷の接点

只見の民具から引き出せる  
情報のカバ領域

- ① 人類の文化は、環境との対話のなかで生成され継承されてきた知恵・技能・感性の総体である。
- ② 人類史の大半は自然環境との関係が中心、近くは人為的環境の比重が大きくなる。
- ③ 地球史のなかで生成され埋納されてきた鉄・石炭・石油の、人類による地表面利用が環境破壊を起した。
- ④ ホモ・サピエンスの出アフリカも明暦の大火もクール・ビズも、壮大な人類史の一コマである。
- ⑤ この壮大な人類文化の総体は、文字記録ではとれない。そこで非文字資料に注目した。
- ⑥ 文字に記録されなかった人類文化は、環境や身体技法や民家・民具・図像に痕跡を残す。
- ⑦ COEプログラムは「非文字資料からの人類文化の解明」という映画の制作に相当し、各班は撮影チームにあたる。
- ⑧ したがって、図像・身体技法・感性・環境それぞれが映画の重要場面であり、その間に軽重・優劣はない。
- ⑨ いい映画を作るためには、チーム間でシナリオを共有する必要がある。早急にシナリオを練らねばならない。



数万年の大河の流れのなかでは微々たるものであり、また一大学で専任教員を中心にチーム編成する以上は、相互の班、課題チームの距離は大きく離れているし、それが当然である。ところで野球やサッカーは広いグラウンドに9人なり11人が散開して相互の距離は空いているが、それぞれが与えられたポジションを自覚することでひとつのチームとして機能している。同じようにCOEプログラムでもそれぞれの班、課題チームの構成員が、共通テーマである「人類文化研究のための非文字資料の体系化」と自分との位置関係を明確にすることによって相互の位置関係を確認すれば、ひとつのチームとして動くことができる。ならばそうしようと呼びかけたのである。その折りに作成した資料を図6に掲げた。

**相互の位置関係の確認** たとえば川田順造氏の日本人・フランス人・西アフリカ人の身体技法の比較研究は、川田氏の言葉を借りれば「断絶のなかの比較」であり、文化の根底にある「原理」の発見が研究の主目的であって歴史学的研究ではないが、時間軸というなら10数万年前にアフリカを出て全地球に展開したホモ・サピエンスがそれぞれの環境との関わりのなかで身につけてしまった身体技法の比較であり、全地球を対象とした10数万年前以降の人類と地球環境との関係を扱っていることになる。河野の研究は犁でいえば、東アジアでは2500年前に登場して以降の展開と、6～7世紀に日本に伝来して以降の展開を扱っており、犁という非文字資料を手掛かりに、2500年前以降の東アジアにおける人類と自然の相互関係史の復原を世紀を単位に進めているのである。1班の絵引きの編纂は18～19世紀の日本や東アジアの図像資料を手掛かりに、文字資料では見えなかった人と自然環境や都市・街道との相互関連のなかでの生活の展開を追っており、北原糸子氏は主として江戸後期、200年前以降の日本を舞台

に災害史という形で人類と自然環境や都市といった人工環境との相克の様相を追っているのであろう。香月洋一郎氏を中心とするグループは、渋沢写真を題材に、その1枚1枚についての基礎調査と、ここ70年ほどの日本や東アジアの環境変化を扱っているということになる。

これを本の出版にたとえるなら、神奈川大学21世紀COEプログラムは文部科学省に「生命と地球の共進化」という叢書のなかの「人類文化研究のための非文字資料の体系化」という巻を担当すると申し出て認可された。そしてたとえば川田氏の研究がこの本の第2章の第1節に当たるとするなら、河野の研究は第5章の第6節、1班の絵引き編纂は第9章の第5節、北原氏の研究は第10章の第4節、香月グループは第12章の第3節を担当しているというイメージである。ではその他の部分はというと、名前を挙げなかった課題グループの担当箇所を除いては、章名・節名は目次に出ているものの執筆者未定で空白のままであり、「神奈川大学COEでは外部からの協力も得て取り組みましたが、執筆できたのはこれこれの章・節だけでした。残りは重要な課題なので将来皆さんで埋めてくださいね」という呼びかけで終わる、それでいいのだと考えている。空白を空白として認識することによって相互の位置関係が正しく把握できる。研究プロジェクトではこのことが大事であって、実際は離れているものを無理矢理に屁理屈をこねてまとまっているかのように見せかける「統合」だけは、断じてやるべきではない。

**テーマの内在化が必須の条件** 河野の提示したのはひとつの案であり、それぞれの構成メンバーの賛成が簡単に得られるとは考えていないが、大事なのはメンバーそれぞれが、班・課題の作業を進めるなかで「人類文化研究のための非文字資料の体系化」という総括テーマと自分との関わりを模索することで

あり、その結果を交流し合うことである。私もそうだが、おそらく多くのメンバーにとっては「人類文化研究のための非文字資料の体系化」というテーマは突然、天から降ってきたものであった。それを押しつけられた、仕方がないと受け身の姿勢でいる限りは、統合は無理どころか研究そのものがないものにならない。たとえ天から降ってきたものであっても、研究を担当する以上はテーマを自分なりに受け止めなおし、内在化する努力は不可欠である。お互いその努力を進めて結果や経験を交流し合ひましょう、というのが私の言いたかったことである。

**地下水脈でつながる形の統合を** 相互の位置関係が確認できたとして、その先、統合をどう進めるのか。その点については、これも譬えだが「地下水脈でつながる形の統合」を提起したい。先に述べたように河野は文献史学を一時期離れて民具調査に沈潜した。人気のない収蔵庫で一人黙々と民具の計測・撮影を繰り返す姿は、まさに蛸壺に閉じこもった井の中の蛙そのものだが、15～20年目に大化改新政府の長床犁導入政策を発見したときは、これで文献古代史研究者との接点ができたと素直に嬉しかった。また7世紀に各地で出土する一木犁へら長床犁が大化改新政府の流した政府モデル犁のコピーらしいと分かったので、考古学者との接点も見つかった。河野の始めた「民具からの歴史学」は、文献史学・考古学と地下水脈でつながっていたのである。「民具からの古代史」は地域ごとの古代を復原できる強みをもっているが、文献史学・考古学そして「民具からの歴史学」はそれぞれ長所短所があり、見える範囲が違っている。したがって意見が食い違った場合に「おまえが間違いだ」と性急に決めつけずに、ズレが生じたのはなぜなのかとお互いの立場・専門性を尊重しながら見解を付き合わせ摺り合わせる、そんなシンポジウムを今後、各地で開いていきたいと

考えている。

もう一例、1996年に美術史・民俗学者と共著で『瑞穂の国・日本—四季耕作図の世界—』<sup>(6)</sup>を出したとき、同僚だった網野善彦氏から「水田中心史観だ」との批判をもらった。網野氏の非農業民重視も分かるし、海の世界の重要さもそれなりに理解しているつもりだが、ひるがえって前近代日本の基幹産業は何かと問えば、やはり稲作農業であろう。その確信があったので頑冥牢固に稲作農具の比較研究を続けてきたが、ここ数年、政府モデル犁の系譜を引く七道諸国の鍛造V字形犁先付き在来長床犁のなかに、鍛造犁先を途中で鑄造犁先に付け替えたことによると思われる不自然な装着がいくつも見つかった。さまざまな状況からすれば時期的には古代末期以降であり、形態は一律ではなく数国にわたる範囲で共通性をもつグループがいくつか存在することから、中央政府の関与はなく民間的な動きと見られることからして、網野氏が文献史料から論じられた12～13世紀の廻船鑄物師の活動の痕跡と考えられる。桃の木のトンネルを後戻りせずに背をかがめて突き進んでいくと、豁然として桃源郷の景観が眼前に広がる、そんな爽快感である。

個別の研究分野に沈潜することはますます孤立化・細分化を進めるように見られがちだが、もともと人の活動にしても自然現象にしても相互につながった切れ目のない総体であり、われわれが分析の便宜上、個々の学問分野に分節化して取り組んでいるにすぎない。したがって違った分野からアプローチしてもそれを掘り下げていけば、個々の井戸も地下水脈でつながっているの、井の中の蛙同士が握手し合いエールを交換し合うことが可能なのであろう。これはある種の法則性であり、それぞれ別々の学問として違った道を歩んできた分子生物学とプレートテクトニクスは、やがて生命と地球の共進化と

いう大きな体系を作り上げた。生物学と地球科学という異なる研究分野の成果が遭遇してひとつの体系を作り上げたのは、もともと地球と生命体とがインタラクティブな進化をとげてきたという事実があったからに他ならない。数ヶ月前、廣田律子氏の辟邪の芸能の日中比較の発表を聞いて、河野の民具研究との接点が浮かび上がってきた。芸能の日中の類似は、田植え法を伝えた少数民族系稲作民の持ち込みの可能性が浮上してきたのである。北原糸子氏の進める災害研究と河野の民具研究も、いずれどこかで接点が見つかるであろう。それがいつどんな形で現れるか、いまからわくわくして期待している。

## V 理論総括班的 的場昭弘氏の提起について

以上、非文字資料とは何か、その体系化はどうあるべきかについて、一通り私見を述べたので、冒頭で触れた理論総括班的的場昭弘氏の総括のあり方をめぐる発言の検討に入ることにした。的場氏はこの問題に関して2006年10月28日の第2回国際シンポジウム第1日のセッションⅠでの報告（〔的場a〕とする）、翌29日の総合討論での発言（〔的場b〕とする）、COEのニューズレター『非文字資料研究』17（2007.9）の的場氏へのインタビュー「プロジェクトの総括にむけて」での発言（〔的場c〕とする）の3度にわたって意見を述べている。<sup>(7)</sup>以下その的場発言の内容を検討することにした。

**絵引き編纂作業に関して** 的場氏は現在COEで進めている図像、身体技法、景観の研究についてコメントしているが、図像に関しては次のように述べる。

図像を読み取る知覚は視覚です。その意味で視覚データは全体として捉えにくい側面をもっています。目の視線では大きな絵の場合、全体を俯瞰

することが難しいので、どうしても部分に焦点が定まってしまう。こうして文字と同じように、全体を部分、部分に細かく切り分け、その各部分がどういう内容かという資料研究になってしまいます。（〔的場a〕 p46）

的場氏は「大きな絵の場合、全体を俯瞰することが難しいので、どうしても部分に焦点が定まってしまう」と言うが、1985年以降、「絵因果経」の再検討や「四季耕作図」研究で数々の絵画資料を扱ってきた経験からすれば、事実はまったく逆である。屏風の場合、研究者がまず作品と出会うのは美術書か展覧会図録で、そこには全体写真は掲げられていて全体構図はつかめるが、細部が十分見えない。ルーペで拡大しても色彩のドットが見えるだけ、そこで論文を書く際には所蔵先と交渉して作品の写真原版を借用し、大きく引き伸ばして分析にかかることになる。屏風の研究では全体を見るのが先で簡単であり、細部を見ることができるのは、さあ論文を書くぞと腹をくくってからなのである。「大きな絵の場合、全体を俯瞰することが難しいので、どうしても部分に焦点が定まってしまう」というのは、絵画資料研究の現場を知らない人の発言である。

絵巻物の場合は少し事情が違って中央公論社の『日本絵巻大成』27巻、『続日本絵巻大成』20巻、『続々日本絵巻大成』8巻によって、主な作品は全体も部分も観察できる。絵巻物は展覧会ではケースのなかで開いて展示されている部分しか見ることができないが、この頁をめくることによって全巻を通覧でき、他の絵巻物とも比較できる。またこのシリーズは大型の美術書なので、部分もほぼ原寸大で観察できる。

また的場氏は「全体は個々の部分の総体として成り立つという発想はおそらく、全体の視覚が欠落することから起こっている問題だといえます」（〔的場



a] p46) とも述べているが、誰もそんなことは考えていない。美術史家が『國華』、『美術研究』誌などに発表するのは作品論であって、全体構図や皴法、色遣いなどから、いつごろの誰の作品でどういう事情のもとに成立したかを丁寧に考証していくのが常道で、「全体は個々の部分の総体として成り立つという発想」をなさっているようには見受けられない。また河野は四季耕作図の作品分析を『瑞穂の国・日本』(1996)や『歴史と民俗』『商経論叢』『民具マンスリー』誌上で数々おこなってきたが、論文の前半はいつ、誰が、どういう事情で制作した作品かの考証であり、後半で細部の分析を行うのがお決まりのパターンである。

また「文字資料と違って絵図の場合、全体として見るができないわけではありません。全体から見る図像学的分析手法を導入することは是非とも必要なことだと思われます」([的場a] p46) というのが、これも美術史家や四季耕作図研究では誰もがやっていることで、わがCOEでも行われている。渋沢による絵引き編纂は、すでに作品論の研究の蓄積で評価の固まった有名な絵巻物を扱っていたので、当時の編纂メンバーは個々の場面分析から始めればよかったが、図像セッションのコーディネーターである金貞我氏が取り上げている朝鮮時代の風俗画については作品研究が進んでおらず、絵引きに耐える作品の搜索・選定から、作品の性格分析(作品論)と絵引き作業を並行して行わねばならない状況にある。第2回国際シンポジウムの第Ⅱセッションでの金氏の報告「韓国・朝鮮編の生活絵引編纂と図像資料―「平壤監司饗宴図」を例にして―」は、将来絵引きに取り上げるべき「平壤監司饗宴図」を分析した作品論である。全体として図像班に対する的場氏のコメントは、釈迦に説法であった。

渋沢写真の研究について 渋沢写真の研究について

「ただこの研究も写真の場所や位置、それがいつ撮られたのかというデータ処理の方に時間がとられている感があり、早くデータの分析、すなわちそこに住む人の生活の分析に進む必要があるようにも思われます」([的場a] p48) とある。確かに早くそこに住む人の生活の分析結果は知りたいものである。しかしながら実証的研究はもともと牛歩の歩みが当たり前であって、まず資料の性格を固めていくのが第一歩で、成果を急かすよりも、まずCOEをきっかけに渋沢写真の研究が学外研究者も交えて本格化したことを評価するのが先ではないか。

**河野の古代史復原に対する批判** COEのニューズレター『非文字資料研究』No.17(2007.9)の的場氏へのインタビュー「プロジェクトの総括にむけて」([的場c])では、河野が国際シンポジウムセッションⅢで発表した民具からの古代史復原に対する批判がなされている。

たとえば、4世紀、5世紀の農民も、民具を私たちと同じレベルで認識していると考えた方が、説明としてしやすいでしょうね。だから、ある道具を見てこれは間違いなく野良作業の道具で、こんな風に使う。大きいとか小さいか、あるいはどういう風に使うか、若干差はあるけど、基本的には我々の経験内で考えよう、という発想になりますよね。しかし記号論的に考えると、そうとは言えない。そのように言えるためには、それを道具として使うという歴史的認識が必要です。たとえば、河野通明先生のお話で、民具を普及させるために民具の縮尺モデルを配ったという話がありました。しかしモデルという発想自体が、近代の発想ですよ。また今であれば宅配便で送ればいいのですが、交通手段を考えても、簡単ではない。

古代の様々な事象を近代的な概念や発想で把握することには注意をしなければなりません。もう

一回古代の歴史状況、そして彼らの発想に遡って、チェックしないといけないでしょう。こうした意味を精査しないとそもそも証明にならない。つまり、いつの時代も同じ人間がいて、同じように発想するという考えは、歴史を説明しようとして歴史を否定してしまう。([的場c] p10)

歴史家河野に対する正面からの批判であるが、これは当日の河野報告の内容とは大きく外れた見当違いの批判である。そこで当日使ったパワーポイントの該当場面を図7に掲げておいた。

河野報告の内容は次の通りである。これまで農具は各地の地形や土質によって改良されたためさまざまなバラエティーが生じたと考えられてきたが、実はこれは大きな間違いで、犁でいえば古代以来ほとんど形は変わっておらず、20世紀の民具からでも朝鮮系・中国系とその混血型の見分けができる。したがって犁型から地域ごとの古代史が復原できる、ということを確認した上での展開である。

朝鮮系無床犁が各地で見られるのは朝鮮系渡来人の持ち込みで説明できる。ところが中国系渡来人が大挙して日本列島に渡ってきたという歴史はないにも関わらず、九州から関東地方まで中国系長床犁が見られるのはなぜか。中国系長床犁の伝来時期は6世紀の朝鮮系無床犁の上に中国系長床犁の波を被っているので7世紀以降であり、8世紀初頭の辞書に長床犁が出ていて普及が確認できることから伝来の下限は7世紀以前となり、2つの条件の重なりから伝来時期は7世紀と絞り込める。7世紀には日中の民間交流はなく、遣隋使・遣唐使の外交ルートに限られるので、政府が政策的に導入し地方に普及を図ったことになる。

地方に普及させようとするなら、その技術移転はどうしたか。古代では中国でも日本でも実物模型を送る方法が使われ、そのモデルを中国では「様」、

日本でも「様（ためし）」と呼んだ。この政策に実効性をもたせるには地方豪族のもとに届ける必要があり、評督（後の郡司）の数は約500、そこで500ほどの様＝政府モデル犁をつくって全国に配付したと推定した。ここまでは状況証拠による推定なので検証が必要である。

1985年以降、香川県、兵庫県の3遺跡、長野県から、鍛造犁先の痕跡と一木造りの犁へらを備えた7世紀中葉の犁が相継いで発見された。長野県のは祭祀用ミニ模型である。中国や朝鮮半島では鑄造犁先・鑄造犁へらであり、鍛造犁先・一木犁へらはアジアにはない日本独自のものである。一般に木器は残りが悪いことからすれば、香川・兵庫・長野での発見は全国的といってよく、鍛造犁先・一木犁へらが共通し、犁床長も72cm前後であることからして、何か規格があったことが想定される。これは先ほどの政府モデル犁にもとづくコピー犁と考えれば辻褄が合う。つまり状況証拠からの7世紀政府による長床犁普及政策という推定は7世紀の出土資料で検証されたことになる。

もしこれが事実なら、各地の民具のなかに一木犁へらの痕跡が残っていていいはずである。そこで全国の在来犁をチェックすると、九州から関東地方まで各地で一木犁へらや鍛造犁先の痕跡が見つかり、先の推定が重ねて検証できた。このダブルチェックにより、7世紀政府（論証は省略するが大化改新政府）の長床犁導入政策説は学説として定立できた、というのが当日の報告である。この部分はいわばヤマ場で、聴衆の方々は頷いて聞いてくれていたし、外国からのコメンテーターや招待客の方々からも評価されたようで、通訳担当者を通して河野の発表はよかったとの報告を受けた。だが不思議なことに的場氏だけには河野発表はまったく理解されていなかったことになる。

図7 長床犁導入政策 仮説と検証





「民具を普及させるために民具の縮尺モデル（正しくは実物大モデル）を配ったという話がありました。しかしモデルという発想自体が、近代の発想ですよね。また今であれば宅配便で送ればいいのですが、交通手段を考えても、簡単ではない」とあるが、古代では中国でも日本でも技術移転に「様」を使ったのは文献史料で確認され、古代史研究者の間ではいわば常識である。また交通手段についても7世紀政府は全国支配を実現するため東海道・東山道など七道を整備したことは周知の通り、平野部では直線道路の形態が多いことは歴史地理学研究が明らかにしており、静岡県では幅9m、左右に3mの側溝を備えた古代東海道が300mにわたって発掘されている。しかもこの道路の側溝からは常陸国鹿島郡の荷札木簡が出土しており、新設の官道が地方から都への税の輸送に使われていたことが確認されている。

**農具は的場氏の切り捨てた第Ⅰ類の文化** 先ほど見たように的場氏は「ある道具を見てこれは間違いなく野良作業の道具で、こんな風に使う。大きい小さいか、あるいはどういう風に使うか、若干差はあるけど、基本的には我々の経験内で考えよう、という発想になりますよね。しかし記号論的に考えると、そうとは言えない。そのように言えるためには、それを道具として使うという歴史的認識が必要です」と言っているが、農具は自然物の土地に働きかけるために作られたものであり、そのためその形は機能を反映している。言い換えれば形は用途に規定されており、したがって形を見れば用途がわかるということになる。一般に用途にしたがって作られた道具には無駄が少ないので、用途が同じであればまったく系譜的つながりをもたない異なる文化圏の農具であっても、結果的に形が似てしまうという平行進化も認められる。これを河野は道具のもつ「機能情報」と名づけた。民具研究者や農業技術史研究者が「あ

る道具を見てこれは間違いなく野良作業の道具で、こんな風に使う」と判断するのは機能情報に依っているわけで、根拠のある判断なのである。

農具は生きるための食料生産の道具である。したがって家族の生存がかかっているわけで、親は小さいうちから子供に農具の使い方を教え込み、子供は恐い親父や祖父に叱られながらその技術を習得しようと努める。この子供にとっては農具の形も使い方も所与のものであって疑う余地もなく、子供が成長すれば同じことを子供に教え込むので、農具の形と呼称、その使い方＝民俗技術は世代を超えて継承され、ときに千年をも越えて継承されていく。この世代を超えて継承されてきた道具の形や呼称、使い方を河野は「歴史民俗情報」と名づけて分析を進めた。

的場氏はすでに見たように非文字資料を考えるにあたって、自然環境に適応するために生み出された第Ⅰ類の文化を思考回路から外していた。農具はこの第Ⅰ類の文化のなかに含まれているための的場氏の研究関心の範囲外であり、したがって的場氏はこと農具に関しては、まったくの素人なのである。河野に限らず農具研究者が「ある道具を見てこれは間違いなく野良作業の道具で、こんな風に使う。大きい小さいか、あるいはどういう風に使うか、若干差はあるけど、基本的には我々の経験内で考えよう、という発想」をするのは、農具が対象物たる自然条件の規定を受けており（だから機能情報）、また歴史的社会的規定も受けている（それが歴史民俗情報）からである。

道具の形は対象物から自由ではないのであって、釘を打つ金槌・ハンマーは国の違い、文化の違いに関わらず、基本的には重い槌部と軽い柄がT字形に組み合わせられた形をとり、その基本形の同一性の上での日本の金槌とヨーロッパのハンマーの違いが歴史的社会的規定を受けた部分であって、河野はそれ

を歴史民俗情報と名づけて、日本国内の農具の比較研究や東アジアの比較研究を進めてきた。農具・道具の研究において、自然条件の規定や歴史的社会的規定を考慮せずに頭のなかだけであれこれ論じてみても、それは空理空論にすぎず、何の社会的意味ももたない。農具を例に引きながら「記号論的に考えると、そうとは言えない」と軽っぽい発言をする的場氏は、おそらく各地の農具を比較研究したこともなく、農具の形が用途に規定されることも、生きるために世代を超えて継承されることについても考え及んだ経歴をもたないのであろう。資料にもとづく具体的検討を行っていない以上は、単なる哲学者の知的お遊びにすぎず、COEの舞台で農具を論じられるレベルではない。

「文法的コードから非コードへ」 国際シンポジウム2日目の総合討論において的場氏は、非文字資料は非コードで読もうという提案をした。

私の報告に関しては、非文字資料の方法に関するものでしたが、いわゆる文字的な資料の方法を超えたような方法論がありえないかという問題提起でした。(中略) 文字資料はひとつの文法的コードをもつ。(中略) それにしたがってすべてのものが同じように理解され、同じように発見され则认为られていたわけです。しかし、実はそのコード自体他の見えない部分を消していたわけで、その消した部分、すなわち文章コードに見えないような部分を新しく読むことができる。この消された部分を非コードといったのですが、(中略) 非文字資料の研究とは畢竟このコードの解読ではないかと考えます。([の場b] p244)

的場氏は言うが、的場氏も準備委員会メンバーであった第2回国際シンポジウムは、「図像・民具・景観 非文字資料から人類文化を読み解く」というテーマを掲げた。この「読み解く」の意味は、図

像・民具・景観という非文字資料を文法的コードで読み解き、文字資料に頼っていた人類文化研究の可能性を大きく広げようという共通認識であったはずだし、図像、民具、景観それぞれのセッションの報告者もコメンテーターもその方向で発言し、コメントしていた。

非文字資料を文法的コードで読み解くことは、アナログ資料をデジタル資料に変換することを意味する。言葉は人の認識をくぐって記号化されて表出されたものなので、デジタル資料であり、それを頭脳の外に記録した文字資料もまたデジタル資料である。あるがままの民具や景観は言葉化されていないアナログ資料であるが、それを人が観察して情報を引き出せば、言葉というデジタル資料に置き換えられて表出され、文字というデジタル形式で記録できるのである。神奈川大学21世紀COEプログラムの狙いは、アナログ資料である非文字資料を、それぞれ専門分野の研究者の観察・分析活動を通して大々的にデジタル資料化する、その方法を確立しようというところにあり、その画期性が認められて文部科学省の審査に合格し、多額の助成金が出た。そこで各班がそれぞれ資料の収集・分析を進め、まとめの近づいた段階で第2回国際シンポジウムのテーマに「図像・民具・景観 非文字資料から人類文化を読み解く」を掲げたのであった。

「具体的研究より認識論研究を」という提起 神奈川大学21世紀COEプログラムのニューズレター『非文字資料研究』No.17(2007.9)の的場氏へのインタビュー「プロジェクトの総括にむけて」では、もう少し煮つめた形で提起されている。

文字であるか文字でないかという対象の問題をあれやこれやと問題にするより、それを認識する側の頭の構造の方に、むしろ問題をもっていった

方がいいと思うんです。つまり、民具や身体がどう非文字であるかという問題よりも、民具や身体をどのように理解しようとしているのか、どのように認識しているかと思っているのか―誤解も含めて―、そこらあたりの方を、むしろ問題にする方がいいのかなと思います。(中略)

ですから、対象はなにかという問題ではないわけです。対象をそれぞれやること、たとえば身体技法をテーマとしたり、景観をテーマとしたりすること、それはそれとして大変興味深いことです。しかしそれを理論的に分析することは、それをどう認識するかということ、つまり解釈の問題になるわけです。そこをポイントにすれば、民具であろうと、風景であろうと、あるいは、絵画であろうとも、共通項が見出せるだろう。([的場c] p5～6)

つまり非文字資料そのものの具体的研究をやめて、それをどう認識しているかという研究に切り替えよと説いている。第2回国際シンポジウムでの「特にここ30年で学問的研究方法がすっかり様変わりしています。これまで当然と思われてきた実証研究も、かなり哲学的議論を入れてやりなおさねばならなくなっています」という発言は、このことを指していたものと思われるが、ここまでくれば神奈川大学が文部科学省に申請した「人類文化研究のための非文字資料の体系化」の趣旨と大きく逸脱している。神奈川大学21世紀COEプログラムは、20名の専任教員と外部から20名の共同研究員をそろえてスタートした。これほどの大所帯で始めたのは、図像・身体技法・景観を具体的に研究するために、その広い分野をカバーすべく専門研究者をそろえたためであった。たとえば内部で「概要」と呼び習わしている神奈川大学21世紀COEプログラムの構想・組織・具体的内容を紹介した『人類文化研究のため

の非文字資料の体系化』(2004)の1班の項には、「図像資料の体系化と情報発信」と題して次のように述べる。<sup>(8)</sup>

第1班の達成目標は、第1に『絵巻物による日本常民生活絵引』のマルチ言語版の編纂と出版である。絵引に付された絵から読み取った解説文を英語訳し、描かれた事物に付された名称を英語、中国語、韓国語に訳して、世界的な図像資料にしようとするものである。

第2の達成目標は、近世・近代生活絵引きの一部を刊行開始することである。(中略)

第3の目標は、東アジア生活絵引の編纂作業である。(中略)

以上のように、研究班としては3つの課題を掲げ、その達成を目指す。が、文章にも「作業」という表現を多用したように、研究開発というよりも、作業という側面が強い。しかし、作業の過程では、様々な問題点を検討し、図像資料の性格を明らかにし、また将来的には欧米の図像についても同様の生活絵引きの作成可能な方法を開拓していくつもりである。

この「作業」を含む実証的研究が申請内容であり、それが認可され予算が下りたのである。的場氏の言うような非文字資料の具体的研究をやめて認識論研究に切り替えることは、神奈川大学21世紀COEプログラムが申請した内容を自らが否定することになるが、的場氏にはその点が理解できているのだろうか。的場氏が非文字の具体的研究より認識論研究をと主張したいなら、それは2002年度の申請準備段階の会議でなすべきであった。

「既存の研究の延長線上でのみ考える必要はない」という提起 的場氏は第2回国際シンポジウムセッションⅠでの報告の結語として次のように述べる。

さて以上、非文字資料の研究の可能性について、



方法論的可能性から論じてきましたが、新しい研究にはつねにつきまとう問題が浮上しています。暗中模索の部分と、既存の研究に足をひっぱられている部分です。「人類文化研究のための非文字資料の体系化」というのを文字通り、既存の研究の延長線上でのみ考える必要はないということです。体系化というのは新しい研究方法を開発することでもあります。その意味で、新しい可能性に向かってどんどん冒険をすべきなのではないかと思います。([的場a] p48)

つまり的場氏の目から見れば、「[人類文化研究のための非文字資料の体系化]というのを文字通り」に受け止めるのは意味のないことであり、各班の進めている研究は「既存の研究に足をひっぱられている」愚かなやり方なのである。これである程度納得がいった。的場氏が絵引き編纂班や河野の民具研究を事前に取材していながら、その学習効果がまったく見られず、河野発表を聞きながら内容がまったく理解できていなかったのは、取材の前から、また発表を聞く前から、どうせ「既存の研究に足をひっぱられている」愚かな研究と考えていたために、的場氏の意図に反して頭脳の方が拒否反応を示して受け付けなかったのであろう。世間で言う「予断と偏見」のパターンである。

「体系化というのは新しい研究方法を開発することでもあります。その意味で、新しい可能性に向かってどんどん冒険をすべきなのではないかと思います」というのは賛成であるが、実証的研究では既存の研究を否定することではなく、それを踏まえてその延長線上に新たな一步を付け加える形で行ってきた。たとえば1班の金貞我氏の研究はこれまで手薄だった朝鮮の風俗画研究に近年の研究動向をふまえた新しい視点を持ち込んで切り込もうとするものであり、2班の廣田律子氏のモーションキャプチャー

を用いた東アジアの芸能の身体表現比較もこれまでの感性的・定性的比較を超えて定量的比較を持ち込んだもので、河野の民具研究も民俗学者が苦手とする収蔵庫で遺物化した民具から歴史民俗情報を引き出し再構成することで「民具からの歴史学」という新しい学問体系を構築しようとする野心的なものであって、それぞれ「新しい可能性に向かってどんどん冒険」をしているのである。

**海面の風波と海底の深層流** 的場氏は近年の実証的研究に対して次のように述べている。

特にここ30年で学問的研究方法がすっかり様変わりしています。これまで当然と思われてきた実証研究も、かなり哲学的議論を入れてやりなおさねばならなくなっています。新しい方法に対してむしろ積極的に果敢に挑戦する研究でいたいものです。([的場a] p48)

と言うが、実証的研究の現場では、こんな危機的状況は生まれていない。文献史学についてはいちど歴史学研究会・日本史研究会編『日本史講座』全10巻<sup>(9)</sup>(2004)を開いて見られるが良からう。近年の文献史学は驚くほどゆたかな時代のイメージを実証的研究から導き出している。自然科学の分野でも、1970年以降のプレートテクトニクスの発展はこれまで個別に研究されてきた固体地球上に起こる造山運動や陸上・海底の大地形、地震や火山活動などを、核が熱く地殻表面は冷たいという温度分布からくるマントル対流でものの見事に説明してみせ、地震の予知研究のベースとなっている。また人類の科学技術はオゾン層を破壊してしまったが、その科学によってオゾンホールが発見されたのは1985年で1987年には早くもモントリオール議定書でフロンの制限が打ち出された。また2007年のノーベル平和賞を受けたIPCC＝気候変動に関する政府間パネルの作業部会を構成するのは世界の気象学者グループであ

る。

ところでの場氏の紹介した哲学思想の流れや氏の属する評論の世界で展開されるあれこれの議論は、実証屋の河野から見れば、海の表面の風波やうねりのように見える。それに対して既存の研究を踏まえてそれに一步を付け加える形で営々と展開されてきた実証的研究・実証科学の流れは、近年発見された海洋の深層流、すなわち北大西洋で潜り込み、大西洋の海底を這うように南下してアフリカ南端をまわり、オーストラリアの南を回って太平洋を北上し、カナダ沖で海面に湧き上がるという海洋底の海流に似ている。2千年をかけて地球を一周するという海洋水の大循環は、動きは遅いが後戻りはしない幅広い大河のような流れである。実証研究を束ねる「人類文化研究のための非文字資料の体系化」プロジェクトはこのようなものとして位置づけられるべきであろうし、COE後に設立が予定されている非文字資料研究センターも、渋沢敬三の日本常民文化研究所の流れを酌んで、着実な実証研究を行うセンターと位置づけられるべきであろう。

## Ⅵ 民具・民族をめぐる ラフィン氏の質問への回答

総合討論の質問の時間に、ブリティッシュ・コロンビア大学のクリスティナ・ラフィン氏から、言葉の裏につきまとう政治性を問題にされ、「民具」「民族」についてはどうかと質問された。これについての私の答えは不十分だったので、少し補っておきたい。

「民具」について まず民具については、「民俗学」「民芸」などと同時代に生まれた言葉であり、科学的歴史学を目指す者からは若干の違和感をもったが、21世紀初頭の日本では、① 日本でもっともポ

ピュラーで権威の認められた国語辞書『広辞苑』にも「民具：民衆の日常生活用具の総称」と出ているように日本語化していること、② 「平成の大合併」と呼ばれる市町村合併のなかで、いま民具は廃棄の危機にさらされており、民具を「住民遺産」として地域住民による保存運動を起こしていく必要があることから、「民具」という言葉を積極的に使っていると考えている。その上に立って、70年前の渋沢敬三らによる民具とは「我々の同胞が日常生活の必要から技術的に作り出した身近卑近の道具」（1936年）という規定は問題が多いので、道具と民具の重なりと違いを明確にした「民具とは、機能情報のほかに歴史民俗情報を併せもった道具類」という新しい既定の提案をした。

ゆたかな歴史民俗情報をもった伝統的道具類が生活の近代化のなかで忘れられ捨てられていくのは世界共通の傾向であり、その保存運動の必要性も共通の課題であろう。そうしたなかで、「民具とは、機能情報のほかに歴史民俗情報を併せもった道具類」という内容を盛り込んだ「民具」という言葉は、東アジアの漢字文化圏では共通語として使って、東アジア規模での民具研究、民具保存運動を起こして行ければと考えている。

「民族」について 「民族」(ethnic group)については、ヨーロッパと日本では、問題状況が違うのではないかと考えている。ナチスはユダヤ人差別を前面に押し立てて支配の維持をはかったが、戦前の日本は植民地台湾や朝鮮で皇民化政策を展開し、日本語教育を押しつけ民族文化を抹消する方向で支配を維持しようとした。ヨーロッパの歴史教育ではゲルマン民族の移動は不可欠の要素であるが、日本では稲作民の流入も民族移動とは理解されず、稲作の技術が伝わり採集・狩猟民が米を食べるようになったと単なる文化の伝播として理解されてきた。ここ

では事実としての民族の違いを発掘し確認しあうことが、重要な課題なのである。

戦後の歴史研究をリードしたマルクス主義の唯物史観は、経済発展による階級関係の変化による社会構成の展開を主軸に据えたが、近代の国民国家日本にいたるまでの、日本列島上で展開した諸民族の相互関係や統合過程には関心を向けてこなかった。これらが政治家の「日本は単一民族国家」という発言や、国際化した今日における「民族問題に無関心・無知な日本人」のベースにあると考えられ、したがって前近代の日本列島への稲作民の移住による多民

族社会の出現とその民族分布、その後の諸民族の相互関係や統合過程の具体的・実証的解明は歴史研究の重要課題と河野は考えてきた。この分野は文献史料には痕跡が残りにくい、民具や民俗技術から歴史民俗情報を引き出すことによって解明の手掛かりは得られるものと確信している。この観点から2班での河野の研究テーマを「身体技法の違いにもとづく古代日本列島の民族分布の復原」とし、東北地方の木摺臼の分布調査から古代日本列島の民族分布の痕跡の抽出と分析をつづけている。

(この・みちあき)

【注】

- (1) 古島敏雄『日本農業技術史』（初版1947、49年。東京大学出版会『古島敏雄著作集』第6巻所収、1975）。
- (2) 河野通明「民具の埴調査にもとづく大化改新政府の長床埴導入政策の復原」（『ヒストリア』第188号、2004）、pp.194-221。
- (3) 川上紳一『生命と地球の共進化』（日本放送出版協会、2000）。
- (4) 神奈川大学21世紀COEプログラム『人類文化研究のための非文字資料の体系化』（神奈川大学21世紀COEプログラム「人類文化研究のための非文字資料の体系化」研究推進会議、2004.8発行、07.4改訂）。
- (5) 第2回国際シンポジウム報告書『図像・民具・景観 非文字資料から人類文化を読み解く』（神奈川大学21世紀COEプログラム「人類文化研究のための非文字資料の体系化」研究推進会議、2007）、p.38。
- (6) 冷泉為人・河野通明・岩崎竹彦『瑞穂の国・日本—四季耕作図の世界—』（淡交社、1996）。
- (7) [的場 a] 第2回国際シンポジウム報告書『図像・民具・景観 非文字資料から人類文化を読み解く』、pp.34-48。  
[的場 b] 『図像・民具・景観 非文字資料から人類文化を読み解く』、pp.242-274。  
[的場 c] ニュースレター『非文字資料研究』17の的場氏へのインタビュー「プロジェクトの総括にむけて」、（神奈川大学21世紀COEプログラム「人類文化研究のための非文字資料の体系化」研究推進会議、2007）pp.9-14。
- (8) 注（4）『人類文化研究のための非文字資料の体系化』（2004）p.5。
- (9) 中村哲編著『歴史はどう教えられているか—教科書の国際比較から』（日本放送出版協会、1995）、p.41。
- (10) 歴史学研究会・日本史研究会編『日本史講座』全10巻（東京大学出版会、2004）。